



2023 Vol. 1

# くらしき幼児教育ネットワーク News Letter

## <<CONTENTS>>

- 理事長あいさつ
- 令和4年度「総会」報告 ● 令和4年度「協議会」報告
- 論説「子どもを尊重する」ということ
- くらしき幼児教育ネットワーク役員、加盟園、養成校及び規約
- その他

## 理事長あいさつ（敬愛・第二敬愛幼稚園園長 永宗 智子）

みなさま、こんにちは。くらしき幼児教育ネットワークの理事長を仰せつかっております敬愛幼稚園・第二敬愛幼稚園園長永宗智子と申します。

この会は、平成18年に幼児教育の現場として必要な情報の共有、未来を担う子どもたちの人格形成に必要な幼児教育の研究実践、感性豊かな幼児教育関係者の養成を通して、岡山県における幼児教育の発展に寄与することを目的として設立いたしました。岡山県内にある幼稚園教員養成機関（養成校）と倉敷市私立幼稚園協会に加盟している幼稚園・こども園が所属しています。

具体的には養成校の担当者と協会加盟園の園長が会に参加し、教育実習の在り方や教員に必要な資質・能力について協議したり、幼児期の教育の重要性を周知するための研修会を実施したりしています。養成校の学生さんから取ったアンケートや、幼稚園・こども園側から学生さんに対する期待などをすり合わせながら、教育実習が充実したものとなり、現場で働く意欲につながることを目指しています。

幼児期に培われた感性は大人になっても影響し、可能性へとつながります。ひとりひとりにその可能性はあります。それらの幼児と関わる職業であることはもちろんですが、それよりも今の自分磨きとして、学生の皆さんは多くの出会いや体験を積み人生の勉学に励み、現場で働く方々は目の前の子どもたちとその時その時を大切に過ごし、先人としてあとへ続く人たちの道しるべとなるよう、質の向上に取り組みながら進みましょう。そして、毎日を楽しみましょう。

## 令和4年度 「総会」 報告

令和4年度の「総会」は次のとおり、令和4年6月15日（水）に実施された。

総会は議事次第に合わせて実施された。

### 1) 開会

### 2) 理事長あいさつ

くらしき幼児教育ネットワークの理事長である永宗智子理事長（敬愛・第二敬愛幼稚園園長より、昨今の新型コロナウイルス感染症による会の開催の中止やZoom対応などについての話があり、久しぶりの対面での総会開催に対して喜びと感謝の意を申し上げた。

### 3) 自己紹介

養成校と幼稚園の総会出席者全員がそれぞれ自己紹介を行った。

### 4) 経緯報告

くらしき幼児教育ネットワークの設立に至る経緯について、永宗幸信理事（敬愛・第二敬愛幼稚園）より、これまでの経緯の報告が行われた。

### 5) 議長選出

「協議」に入るため、議長を選出し、理事長がこれを担うことが承認された。

### 6) 協議

①令和3年度 事業報告ならびに決算報告

②会計監査報告

③令和4年度 事業報告ならびに決算報告

上記報告に関して、特段の質問などはなかったが、決算報告の記載（「予備費」と「繰越金」）の表記について提案があったため、修正する運びとなった。

### 7) 情報交換

これからのくらしき幼児教育ネットワークの活動について、都田理事（岡山短期大学）より下記の提案を申し上げた。

◎くらしき幼児教育ネットワークのHP（岡山短期大学のHP内に開設）に、「くらしき幼児教育ネットワーク News Letter（仮称）」の掲載を提案した。内容としては、養成校側の教員による寄稿や園側による現場の声（絵本や紙芝居など）を掲載する方向で調整したい旨をお伝えした。

→養成校や園側より下記のような様々な意見を頂戴した。

- ・できれば、そのなかに「卒業生の頑張っている姿」を載せてほしい。
- ・園側がどのような学生や実習生を望んでいるのかについてまとめてほしい。
- ・ボランティアに来てほしいので、その情報を載せてほしい。 など

これらの要望にも応えていくかたちで、次回の役員会と協議会にて発展させていく旨が確認された。

8) その他

松井園長（御国幼稚園）より、幼稚園への就職が少ないことについて、現代の子どもたちが「イージー」になっていることなど様々な側面から話があり、園側も努力するが、養成校側にも努力していただきたい旨の要望があった。

9) 閉会

森理事（山陽学園短期大学）より、閉会のあいさつがなされた。

## 令和4年度 「協議会」 報告

令和4年度の「協議会」は次のとおり、令和4年11月14日（月）に実施された。

### 1) 開会

開会の挨拶が永宗智子理事長よりあり、本日の協議会の趣旨である養成校と園側との交流をより活発にすることについて説明があった。

### 2) アンケートをもとにグループ討議

本日の協議会は、養成校及び園側の親睦を深めることを視野に入れて、園側と養成校側に事前に実施したアンケートの内容をもとにグループに分かれて、話し合いを行った。アンケートの結果については、別添のとおりであるが、主には「就職」と「実習」についてのお互いの状況や対応などについて情報を共有し、双方にとってよりよい実習に向けた関係が築けるように展開された。

### 3) 就職状況について

話し合いの後、今年度の就職・採用について各園から報告があり、現時点での求人数などについての情報提供があった。

### 4) その他

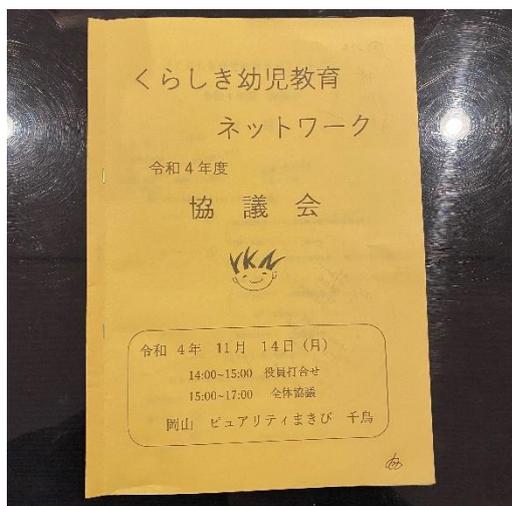
中国学園短期大学の先生より、園側に研究依頼があった。内容としては、倉敷市の幼児教育の優れた点を歴史的な視野も入れつつ、研究しようとするものであった。

### 5) 閉会

閉会のあいさつは、都田理事が行った。内容としては、養成校と園側が今後もしっかりと交流しながら、実習や就職をより充実したものにするために協力していきたい、ということ述べた。

### 6) 協議会の様子

以下は、協議会の様子である。





はじめに

かつて、「人は子どもというものを知らない。子どもについてまちがった観念をもっているので、議論を進めれば進めるほど迷路にはまりこむ。このうえなく賢明な人びとでさえ、大人が知らなければならぬことに熱中して、子どもにはなにが学べるかを考えない。かれらは子どものうちに大人をもとめ、大人になるまえに子どもがどのようなものであるか考えない」<sup>1</sup>と言ったのは、ルソー（Rousseau, Jean-Jacques ; 1712-1778）であった。これは彼の著作『エミール』（1762年）に書かれているものだが、長い年月が経とうとも、決して色あせることを知らない、実に教育にとって重要な指摘をするものである。それは「子ども」とは何か、という問題を提起するものであった。この『エミール』によって、彼が「子どもの発見者」として社会的に認識されたことは言うまでもない。この「子どもの発見」によって、教育は新たな視点を見出し、さらに発展していくことになる。もちろん、その当時の教育における理論＝実践への影響だけにとどまらず、今日における教育における理論＝実践にも影響を及ぼし続けている。

このような教育における理論＝実践を考えていく一つの視点が「子どもを尊重する」ということである。

さて、ここで紹介するのはアメリカの思想家であるエマソン（Emerson, Ralph Waldo ; 1803-1882）の教育思想である。エマソンの思想の重要性は、デューイ（Dewey, John ; 1859-1952）や「ドルトン・プラン」の創始者としても有名なアメリカの女性教育学者であるパークースト（Parkhurst, Helen ; 1887-1973）らもエマソンから大きな影響を受けており、それぞれ自身の著作のなかでエマソンの著作から引用をしていることから指摘できる。

### 1. エマソンの教育思想の意味

エマソンによれば、『教育』という言葉の響きは、ひじょうに冷たく希望のもてないようなものであるが、それはなんとも困ったものであり、罪悪ですらあると思わずにはいられない<sup>2</sup>ものである。なるほど、私たちの生活に深く関わっている「教育」は、それ自体が「生きた現象」なのであるが、「教育に関する論文、教育のための会議、講義、教育制度といったものは、いささか中風のような無気力、あくびの出るような退屈さを与え」<sup>3</sup>、そういったものが「生きた現象」を「冷たく希望のもてないもの」にしているのである。

しかし、エマソンは、「教育というものは、人間と同様に広大なもの」<sup>4</sup>と考へ、「人間に内在する要素は、それがいかなるものであっても、育成され表現されるべきものである。その人が賢明であり、その人の受けた教育により、自分の人間的素質を表現すべきであるとするならば、またその人が自分の有する思想の鋭利な刀で、人びとを認識する能力を備えているならば、教育はその

---

<sup>1</sup> ルソー著（今野一雄訳）『エミール（上）』岩波文庫、1962、pp. 22-23。

<sup>2</sup> エマソン著（市村尚久訳）『人間教育論』、明治図書、1971、p. 16。

<sup>3</sup> 同書、p. 16。

<sup>4</sup> 同書、p. 16。

刀を鞘から抜き、それを鋭く磨きあげなければならない」<sup>5</sup>という。つまり、私たちに内在する要素（精神）は表現されるべきものであり、私たちがその要素を自らの思想として、表現し、人びとを認識する刀（認識する力）であるならば、「教育」はその刀を鋭く磨きあげるものであると考えるのである。ここにおいて「教育」はひとつの自己表現の力を磨くためのものとして捉えられている。エマソンにとって、自らに内在する要素（精神）は神との関係においても非常に重要なものであった。しかしながら、その力は、「鞘」におさめられているのである。それは、その力を使うことができないことを意味し、それを「鞘」から出し、さらに磨きあげることが「教育」の役目と捉えている。逆に言えば、そんな「精神」に影響を与えることができるものが「教育」であると考えることができる。

いずれにしても、エマソンが「教育」に希望がもてないとするのは、本質的な教育（ここでは「本質的教育」と呼ぶ）ではなく、現実世界であらわれている教育（ここでは「現象的教育」と呼ぶ）なのである。

さて、そんな現象的教育はいかなるものであるのか。エマソンは「われわれは、子どもたちをして、自分たちが教育されたように教育する」<sup>6</sup>ものとして考えている。現象的教育は、①子どもたちに対して、あらゆるものに対し大志をいだくような教育をしておらず、②子どもたちの崇高な本性を信じてなすような訓練を彼らにあたえておらず、③子どもたちの身体（とくに、目と手）についての教育や訓練をしていないのである<sup>7</sup>。これは、子どもたちを、ただただ有能で真面目で心の広い人間にしようとすることを意味してはいない。「教育」の目的は、「生活の目的とよく均衡のとれたものでなければなら」<sup>8</sup>ず、「道徳的なものであるべきなのである」<sup>9</sup>。

この目的を遂げるためには「教育」はいかにあるべきであろうか。「それは自己信頼を教え、青少年に自己にたいする関心を、自分自身に本性にたいする好奇心を鼓吹し、さらに青少年に自己の心の本源を会得させ、自己にあらゆる力がそなわっていることを教え、自分が生活しているその大いなる精神すなわち大霊にたいする敬虔の念を燃えさせたことにある」<sup>10</sup>。

ここで、エマソンは徹底した自己信頼の重要性に言及している。ここには、「子ども尊重」につながる理念的なものが垣間見える。つまり、そもそも、人間の内なるところに、「あらゆる力」が備わっていると確信しているかぎり、そしてそれが「精神（＝大霊）」とつながっているのであれば、その力は疑いようもないものである。そうである以上、それは完全なるもの（大霊＝神）によって支えられている力である。それは、絶対的に信頼できるものであり、それを信じることは「大霊（＝神）」を信じることである。つまり、「教育は、神の摂理とともに作動するもの」<sup>11</sup>なのである。

ところがしかし、この思想には限界が生じる。それこそ、「大霊」であり「神」なのである。なぜならば、現代において「大霊」や「神」などといった形而上的なものを様々な現象などの原理として

---

<sup>5</sup> 同書、p. 16。

<sup>6</sup> 同書、p. 17。

<sup>7</sup> 同書、p. 17。

<sup>8</sup> 同書、p. 17。

<sup>9</sup> 同書、p. 17。

<sup>10</sup> 同書、pp. 17-18。

<sup>11</sup> 同書、p. 18。

捉えることは、現代において批判されている。

ニーチェは『悦ばしき知識』において、「神は死んだ」<sup>12</sup>と言い、神に対し、死の宣告をおこなった。これ以後、「神」のような形而上的存在はその絶対的存在性を失うことになった。

では、エマソンの思想は「神の死」によって絶対的根拠を失い、その思想自体が崩れてしまうようなものなのであろうか。確かにエマソンの思想は「神」によって根拠づけられている。しかし、それを否定したところで、エマソンの思想は崩れることはない。

エマソンの思想は、自己を信頼することに徹底している。これは、一見すると「神」を根拠として成立しているかに思える。しかし、「神」は信仰するものであることを考えてみると、自己の信頼がなければ、「神」を信仰することは非常に難しいのではないだろうか。つまり、「神」という絶対的なものを、その思想の根拠におくとしても、そこには、「神」を信じる「自分」がいるのである。それは、「神」を信じる、ということを決断している自分が存在しているということであり、そこには自らの意思が深く関わっているのである。

エマソンの教育思想の意味とは、形而上的な存在が否定されたとしても、自己を尊重する、自己を信頼する、という自身の意志決定における理念は残り続けるのである。「教育」がそれ自体原理的につかみにくく、何を信頼してその営為を行うのか、その原点こそ「自己信頼」、「自己尊重」であり、自己からはじまる意志決定なのである。しかしながら、自己を尊重するだけでは、「教育」がはじまることはない。「教育」のはじまりは、あくまで「子ども—大人（教師）」（もっと広義的に捉えれば「人間—人間」）関係間における作用としてはじまるのである。そうである以上、「自己尊重」「自己信頼」だけでは不十分である。（自己に対して他者である）子どもがいる以上、相手をいかに捉えるか、ということも重要となるのである。以下、エマソン教育思想の真髄ともいえる「子ども」の徹頭徹尾の尊重と「自己」の尊重（このふたつの尊重（信頼）をここでは、「教育的相互尊重」と呼ぶ）についての理念についてみていく。

## 2. エマソンの「子ども尊重」と「教育的相互尊重」

前節において、エマソン教育思想の意義をみてきた。

エマソンの教育思想は私たちの生活のなかでかなりの部分を占めている「教育」について何を訴えかけているのであろうか。それこそが、「教育的相互尊重」の理念である。以下、そのことについてエマソンの思想との対話を通してみていく。

エマソンが『教育論』において、教育の秘訣について述べた部分を多少長いが引用しよう。

われわれ自身の経験からして、教育の秘訣は、生徒（子ども…筆者注）を尊重することにある、ということが教えられるべきことを私は信ずる。生徒が知るべきもの、為すべきものを選択するのは、あなた方おとなのためにではない。それは、すでに選択されており、あらかじめ運命的に選定されているのである。したがって、ひとり生徒のみが、みずからにたいする秘訣の鍵を握っているのである。あなた方おとなが、余計な手出しで干渉し妨害し、あまりにも支配しすぎると、ひとりの生徒は自己の目的の達成を妨げられ、生徒は自分自身を見失いかねないのである。

---

<sup>12</sup> ニーチェ著（信太正三訳）『悦ばしき知識』（ニーチェ全集8）、ちくま学芸文庫、1993、p. 220。

子どもを尊重せよ。自然がもたらす新しい産物をあせらずに待つがよい。自然は類似したものは好むが、同類の繰り返しは好まない。子どもを尊重せよ。子どもにたいし、あまりにも親であることをふりかざしてはならない。子どもの孤独を侵害するなかれ。<sup>13</sup>

これは、エマソンの精神的なもの（＝神）を支えとして与えられた理念として受容することが可能であるが、エマソンの信念でもあるように考えられる。いずれにしろ、ここで決定的に重要なことは、「みずからにたいする秘訣の鍵を握っている」子どもを、「尊重」というところにある。ここでいう尊重（respect）は、広義的意味として捉えるのが妥当であろう。それは、子どもの行動の尊重、思考の尊重、などといったものではなく、本質的な「子どもの尊重」であるからである。

さて、エマソンの思想から「子ども尊重」という理念が取りだせたが、まずこの思想の根拠が実に曖昧である。エマソンによれば、尊重しなければならないのは、子どもが「秘訣の鍵」をもっているがゆえに、それを使うことが出来るようにしなければならない、からである。しかもそれは、「孤独」ということによって使うことが出来るものでもある。なぜそう言えるのだろうか。

たとえば、私たちは自らを表現する力を有してはいるが、それを日常においては、最大限使っていない。つまり、他者がいるがゆえに、最大限に使わなくても良いのである。しかしながら、仮に自分以外に誰もいないのであれば、自分で様々なことを思考し、判断する必要に迫られる。この状況は「孤独」であり、「秘訣の鍵」を使う場面となりうるのである。もっと言えば、そんな場面では「秘訣の鍵」の本質に触れることは叶わないのである。これは、エマソンの自己信頼に基づく思想から端を発するものと解することが出来る。齊藤直子氏（以下、齊藤と略す）は、「人は自らの心の内側から光り輝く一筋の光を発見することを学ぶべきである」と述べたエマソンの論文を引用し、これを「内なる光」と表現した<sup>14</sup>。なるほど、私たちのなかにある秘訣の鍵（＝内なる光）を発見することを学ぶことに意味があるのである。この考えを得たことによって、「子ども尊重」の理念に支えられた教育は、「内なる光」の発見に寄与することがその重要な役割を果たしているのである。

齊藤は続けて、『内なる光』は終りなき完成主義の思想において、なりゆく存在を象徴する比喩である<sup>15</sup>とし、この『内なる光』はエマソンとデューイの接点、もしくは暫定的な共通の基盤<sup>16</sup>となるとの考えを示している。デューイとの関係は本論文では取り上げる余裕はないが、エマソンとデューイの関係、ひいてはエマソンとプラグマティズムの関係において、「内なる光」の重要性は言うまでもない。

齊藤はこの「内なる光」における完成主義の教育について述べているので、多少長いが引用する。

『内なる光』に照らし出される完成主義の教育は、日常性の中の美的・宗教的経験を強調する生き方としての哲学に支えられるが、単なる『自分探し』や内に閉ざされた個の思想を志向するものではなく、また、情緒に回帰する道徳教育や宗教的基盤に救いを求める癒しの教育を提唱す

<sup>13</sup> エマソン著（市村尚久訳）『人間教育論』、明治図書、1971、pp. 24-25。

<sup>14</sup> 齊藤直子『〈内なる光〉と教育—プラグマティズムの再構築』、法政大学出版局、2009、p. 16。

<sup>15</sup> 同書、pp. 16-17。

<sup>16</sup> 同書、p. 17。

るものではない。本書で論じられる完成主義の教育とは、アメリカ文化の善き伝統と遺産と考えられる。『生き方としての民主主義』の意味を再評価するものであり、思考とことばの創造を通じて私的領域と公的領域の架橋を志向する、自己と文化と言語の完成のための教育である。それはアメリカの個人主義に典型的に示される強い個人や孤立した自己を提唱するものではなく、むしろ東洋思想の影響を受けた、他者の受容と不可分な自己超越の思想にすら通じるものである。<sup>17</sup>

ここでエマソンの思想は、「個人主義」的なものというより、「他者の受容と不可分な自己超越の思想」に通じるものであるという示唆を得ることができた。エマソンの思想が「個」を尊重している以上、個人主義になる可能性が少なくともあるわけであるが、「教育」に限定して言及すれば、齊藤の言うように、個人主義を根底におくものとはなりそうにない。

むしろ、「他者の受容」の思想は、「教育」において受容となりうる。つまり、子どもの「個」だけを尊重するのであれば、それは、個人主義的教育と呼べるものかもしれない、しかしながら、エマソンの教育思想は、個人主義にはならないのである。そのことをエマソン自身の言を借りて考えてみる。

ところで、私のこのような考え方（筆者注…先ほど引用した教育観）にたいして、けんけんがくがく返答がかえってくるのを、私は、耳にする。あなたは、統制ある公的あるいは個人的な訓練を、ほんとうに投げ捨ててしまうつもりなのだろうか。あなたは、幼い子どもを放任して、その子の情欲と気まぐれの気遣いじみた行路を歩ませ、その無秩序状態を、子どもの自然性を尊重すると呼ぼうというのか。そこで、私は次のように応答する—子どもを尊重せよ。子どもをできるかぎり尊重せよ。しかもあなた自身をも尊重せよ。子どもの考え方にたいして、その仲間であり、子どものもつ友情にたいして、友であれ。子どもの徳性の愛好者であって、—子どもの罪悪の血縁者であってはならない。あなた自身がまことに真実にして、子どもの悪徳にたいしては、まったく相容れない憎悪をもつものであり、子どもの軽薄さにたいしては、動せず軽蔑するものであることを、子どもにわからしめよ。<sup>18</sup>

ここでエマソン教育思想の真髓が現出する。それこそが「子ども—大人（教師）」の尊重関係である。これは、互いに尊重する、される関係であることから、「教育的相互尊重」と呼ぶことができよう。「子ども尊重」の教育理念は、その教育的理念、方法から「子ども」尊重の価値に目を奪われがちであるが、それでは不十分であり、「子ども」尊重の意義を十分に把握できていないものと言えよう。この教育理念にとって欠かすことのできないものが、「子ども—大人（教師）」関係であって、その他の何ものでもない。私は前節において、このような「子ども—大人（教師）」関係によって成り立つ「教育」を「生きた現象」と言った。エマソンが求めた「教育」はそんな「生きた現象」としての、本質的教育なのである。しかしながら、誤解してはならないのは、エマソンの教育思想に

---

<sup>17</sup> 同書、pp. 17-18。

<sup>18</sup> エマソン著（市村尚久訳）『人間教育論』、明治図書、1971、p. 25。

における「教育的相互尊重」は、放任主義的なものにはならないということである。子どもが思考し、行動するがまを尊重するのではない。尊重するがゆえに、「子どもの軽薄さにたいしては、動せず軽蔑する」ことも大切なのである。つまり、教育においては、しつけというものの存在を無視することが不可能であることを意味する。そこで、エマソンのしつけ観について見ておく。

子どものしつけには、その素質を保護することと、それ以外の一切のものを訓練で除去することの二点に留意すべきである。一すなわち、子どもの素質を擁護し、子どもの大さわぎや馬鹿げた言動をとる傾向や粗暴性を阻止すること、一子どもの本性を保護し、その本性をして、その本性が指示する、まさにその方向にはたらく知識の力によって強化せしめること、これが子どものしつけの教育の要点である。<sup>19</sup>

なるほど、エマソンは子どもの本性を尊重する一方で、子どもの大さわぎなどの諸傾向については厳しく向きあうのである。この教育思想における教育関係は、決して放任主義にはならず、また、反教育学的なものともなりはしない。それは、本当の意味で「子ども尊重」の理念となりうるものなのである。つまり、「子ども—大人（教師）」の関係がエマソンの思想によって再構築されうる可能性をもちうることを示している。

### 3. 「教育的相互尊重」の構図と「教育的相互尊重」という理想の追求

では、エマソンの教育思想から創造された「教育的相互尊重」とはいかなるものなのであろうか。まず、教育には「子ども—大人（教師）」の関係がある。そこには相互の尊重および自身への尊重が含み込まれている。これを図式化すれば、下図のようになる。

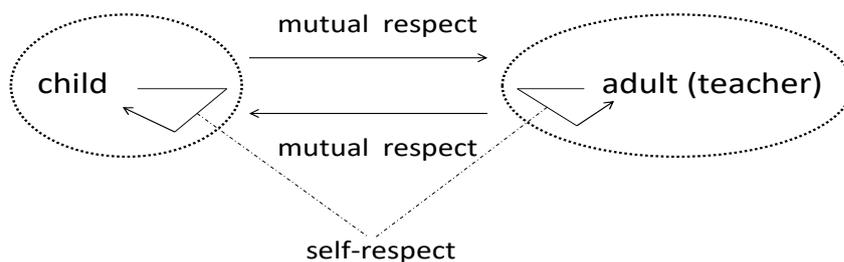


図1 教育的相互尊重

<sup>19</sup> 同書、p. 25。

この図は、言わば「教育的相互尊重」の概念図である。この図が全ての教育関係をあらわしてはいないことは容易に理解できるだろう。なぜならば、教育（特に学校教育）は集団的な営為のため、この概念図では、「子ども－大人（教師）」という「個－個」の関係しか表現できていないからである。しかし、教育はもともと「個－個」が複雑に関係し合うことによって成立しているものであり、その関係を大きな視点でみるがゆえに、「集団」なのである。その視点に立てば、やはり「個－個」の関係が重要であるということはあるまい。

そうであっても、この「教育的相互尊重」の概念図は、あくまで概念として把握するために表現されたものである。各教育現場にすべてこの概念図が当てはまるとは到底考えられない。たとえば、今日において教師は自信をもち、教育にあたっているだろうか。もっと言えば、教師が自分をどれほど尊重出来ているか。また、子どもが教師をどれほど尊重できているだろうか。このようなことを考慮すると、必然的にこの概念図は、その関係性において様々なものへと形状変化をおこしてしまう。著しく、子どもの自身への尊重が強かったり、教師の自身への尊重が弱かったりすることが容易に想像されるのである。

つまり、この概念図は一つの形として提示されるものであり、その複雑な関係性は教師が実践のなかで創りだしていくことになる。重要なことは、やはり「相互尊重」が教育にとって必要であるということである。

教師にとって、互いに尊重される教育現場というものは、実に理想的なものであり、実際に実践で行うことができると考えている人は少なくないだろう。しかしながら、それは追いつきたい理想であると同時に、追いつけることの難しい問題なのである。

では、どのようにして、「教育的相互尊重」の理念を達成していけばいいのであろうか。今一度エマソンの言葉を引用しよう。

子どもを尊重せよ。子どもをできるかぎり尊重せよ。しかもあなた自身をも尊重せよ。子どもの考え方にたいして、その仲間であり、子どものもつ友情にたいして、友であれ。これが、秘訣なのである。「子ども」というものの可能性を信じ、なおかつ、その可能性を信じている自分も信じるのである。（傍点部筆者）<sup>20</sup>

「子ども」にとって、「教師」は全てにおいて指導者ではない。時には、「仲間」や「友」であり、時には「親」のような存在なのである。その存在への尊重に対して、「子ども」たちは応えてくれるのである。

エマソンは、果てしない「尊重」を私たちに訴えたのである。私たちは、エマソンが言うように「子ども」を尊重することができるのだろうか。または、子どもたちへの「尊重」によって教育を上手く行っていくことに確信をもてるだろうか。そのことはエマソンに言わせれば、当然できるものであろう。なぜならば、エマソン自身が子どもを愛し、そんな子どもに「子ども」の本質を見たのであるからである。

#### 4. 「子ども」尊重が私たちに訴えていること

ここまで、エマソンの生涯、教育思想および「教育的相互尊重」の理念について見てきた。では、このエマソンの思想は私たちに何を語りかけるのであろうか。

---

<sup>20</sup> 同書、p. 25。

エマソンは言う。

私は、運動場や街路での主人公である子どもたちが好きだ。—その子どもたちは、どこの商店にも、ギャング・ルンペンの一団にも、射的にも、あたかも蠅が自由に出入りするように、いずれのところにも同じく自由な入場券をもって臨んでいる。それらへの入場は、まったく疑われずに守衛と同様に自然にできるのである。—さらに子どもらには、自分のポケットには一銭のお金もないことは百も承知のうえのことであり、彼ら自身このお金のないことをなんら頓着しないのである。また子どもらは、だれひとりの護衛はつけず、いたるところに入場して、その見せ物の中味を見ているのである。—しかもその見せ物の一切の<sup>きわぜりふ</sup>傍白を聞いているのである。私はそういった子どもたちを愛する。

21

これは、エマソンの「子ども」への愛を感じることでできるものである。また、愛し、「子ども」の本質を見たがゆえに、「子ども」を尊重するところまでいたったのである。

私たちは、「子ども」について何を知っているのでしょうか。エマソンが「子ども」の内に見たものと同じものを見ているのでしょうか。ただただ、神秘主義的な思想であり、私たちの生活からは乖離した思想なのであるか。

エマソンの思想は、私たちに「子ども」への「尊重」を訴えるだけでなく、「子ども」の内は何を見ることが出来るのか、という「子ども」への興味・関心を私たちの内から呼び起こすものなのである。

このことは、今日の教育にとって、非常に重要なことを示唆するものではないだろうか。

## 引用・参考文献

### ○エマソンの原著

*CW* : Emerson, R.W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Emerson E.W. ed. 12vols., Boston: Houghton Mifflin Company, 1903.

### ○エマソンの著作

エマソン著（齋藤光訳）『エマソン選集』（全7巻）、日本教文社、1960-1961。

エマソン著（市村尚久訳）『人間教育論』明治図書、1971。

エマソン著（酒本雅之訳）『エマソン論文集』（上・下巻）、岩波文庫、1972-1973。

### ○その他

市村尚久『エマソンとその時代』玉川大学出版部、1994。

齋藤直子『〈内なる光〉と教育—プラグマティズムの再構築—』法政大学出版局、2009。

---

<sup>21</sup> 同書、p. 20。

## くらしき幼児教育ネットワーク役員、加盟園、養成校及び規約

※令和4年3月末時点のものです。

### (1) 役員

理事長	永宗 智子
-----	-------

理 事	養 成 校	加 盟 園
理 事	都田 修兵	松井 祥子
理 事	森 英子 (書記)	小山 光子
理 事	山内 由子 (書記)	永宗 幸信

監 事	養 成 校	加 盟 園
監 事	山本 房子	神原 彰仁

(2) 加盟園・養成校一覧

認定こども園 竹中幼稚園	尾形学園 しらゆり幼稚園
御国幼稚園	まこと幼稚園
同心幼稚園	認定こども園 第二まこと幼稚園
慈愛幼稚園	倉敷マリア・インマクラダ幼稚園
みのり幼稚園	奈良佐保短期大学附属倉敷幼稚園
勇崎幼稚園	認定こども園 あさひ幼稚園
認定こども園 海星幼稚園	くらしき作陽大学附属認定こども園
敬愛幼稚園	幼保連携型認定こども園 かわさきこども園
第二敬愛幼稚園	

岡山県立大学 保健福祉学部 子ども学科
川崎医療福祉大学 子ども医療福祉学科 子ども医療福祉学科
環太平洋大学 次世代教育学部 こども発達学科
吉備国際大学 心理学部 子ども発達教育学科
くらしき作陽大学 子ども教育学部 子ども教育学科
就実大学 教育学部 初等教育学科
中国学園大学 子ども学部 子ども学科
新見公立大学 健康科学部 健康保育学科
ノートルダム清心女子大学 人間生活学部 児童学科
岡山短期大学 幼児教育学科
倉敷市立短期大学 保育学科
作陽短期大学 音楽学科 幼児教育専攻
山陽学園短期大学 子ども育成学科
就実短期大学 幼児教育学科
中国短期大学 保育学科
専門学校 岡山情報ビジネス学院 保育学科

### (3) 規約

#### 「くらしき幼児教育ネットワーク」規約

##### 第1章 総則

(名称)

第1条 この団体は、「くらしき幼児教育ネットワーク」(以下、本会)という。

(事務局)

第2条 本会の事務局は、事務を担当する校園におく。

(目的)

第3条 本会は、幼児教育の現場に必要な情報の共有、未来を担う子どもたちの人格形成に必要な幼児教育の研究実践、感性豊かな幼児教育関係者の養成を通して、岡山県における幼児教育の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するために次の事柄に取り組む。

- ・幼稚園教員養成課程、とくにより良い幼稚園教育実習のあり方についての協議
- ・幼稚園教員に必要な資質・能力についての協議
- ・幼稚園教員養成機関及び幼稚園での特色ある取組の報告
- ・現職教員の資質向上のためのプログラム開発と運営
- ・幼児期の教育の重要性を周知するための研修会及び講演会の等実施

##### 第2章 会員

(会員)

第5条 本会の会員は、次のとおりとする。

- ・倉敷市私立幼稚園協会加盟園。(以下「幼稚園」という)
- ・岡山県内の幼稚園教員養成機関で本会の趣旨に賛同したもの。(以下「養成校」という)
- ・上掲のほか、本会の趣旨に賛同するもので、総会で認めたもの。

(会費)

第6条 会員は総会において決定した会費を納入するものとする。

- 2 前項の規定により納入された会費等は、その理由の如何を問わずこれを返還しないものとする。

(退会)

第7条 会員で退会しようとする者は、その理由を付して退会届を理事長に提出しなければならない。

##### 第3章 役員

(理事)

第8条 本会に理事をおく。理事には、幼稚園と養成校の双方から若干名就くものとする。

(監事)

第9条 本会に監事をおく。監事には、幼稚園と養成校の双方から各1名就くものとする。

(役員を選任)

第10条 理事及び監事は、各所属団体より選任され、総会において承認を得る。

- 2 理事及び監事は相互に兼ねることはできない。
- 3 理事長1名及び副理事長1名は、理事会において選出する。
- 4 役員欠員が生じた場合、理事会の承認をもって補充できる。

(役員職務権限)

第11条 理事長は、本会の業務を総理し、本会を代表する。

- 2 副理事長は、理事長を補佐し、理事長に事故あるときはその職務を代理する。
- 3 理事は理事会を組織し、会務を執行する。
- 4 監事は、業務の執行状況、資産の状況を監査する。

(役員任期)

第12条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

2 補欠のため就任した役員任期は、前任者の残任期間とする。

3 役員は本会の役員としてふさわしくない行為があった場合、又は特別の事情のある場合には、その任期中であっても会員の3分の2以上の議決により、これを解任することができる。

(顧問)

第13条 本会に顧問をおくことができる。

2 顧問は理事会の推薦により、理事長が委嘱する。

3 顧問は本会の運営について理事長の諮問に応ずる。

## 第4章 総会

(総会の招集)

第14条 総会は毎年1回実施する。ただし、必要に応じて臨時総会を開くことができる。

2 総会の実施は、少なくとも1ヶ月前までに、その会議に付議すべき事項、日時及び場所を記載した書面により通知する。

3 総会の議事進行に必要であると理事会が認めた場合、会員以外の幼児教育関係機関等に通知し、参加を要請できる。

(総会に付議すべき事項)

第15条 この規約に定めるもののほか、次に掲げる事項は総会に付議する。

- ・事業計画及び収支予算
- ・事業報告及び収支決算

(総会の議事)

第16条 総会の議長は、出席者より選出する。

2 総会の議事は、この規約に別段の定めのあるもののほか、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(総会の議決要領等の通知)

第17条 総会の議事の要領及び議決した事項は、会員に通知する。

(理事会)

第18条 理事長又は理事の2分の1以上が必要と認めるときは、理事会を招集できる。

(会議の議事録)

第19条 総会及び理事会の議事録は、議長が作成し、議長及び出席者代表2人以上の署名押印のうえ、これを保存する。

## 第5章 資産及び会計

(資産の構成)

第20条 本会の資産は次のとおりとする。

- ・会費
- ・寄付金品
- ・その他の収入

(資産の管理)

第21条 本会の資産は、理事長が管理し、その管理方法は、理事会の決議によりこれを定める。

(決算の認定、予算の議決)

第22条 本会の収支決算は、理事長が作成し、理事会及び総会の承認を受ける。

2 本会の事業計画及びこれに伴う収支予算は、理事長が総会の議決を経て定める。

(会計年度)

第23条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

## 第6章 雑則

(規約の変更)

第24条 この規約の変更は、理事会及び総会においておのおの4分の3以上の賛成をもって効力を生じる。

(施行細則の制定)

第25条 この規約の施行細則は、理事会及び総会の議決を経て定める。

## 附則

- 1 この規約は、本会設立の日から施行する。
- 2、平成21年10月19日より施行する(第10条 第4項)
- 3、平成27年6月22日より施行する(第2条)

## その他

○「就職説明会」

日 時 : 7月9日(日) 10:00 ~ 12:00

場 所 : 岡山コンベンションセンター

〒700-0024 岡山県岡山市北区駅元町1-4-1

くらしき幼児教育ネットワーク News Letter 2023 Vol.1

編集・筆者	くらしき幼児教育ネットワーク
著作権	くらしき幼児教育ネットワーク
発刊日	2023（令和5年）4月1日